

# 谷崎潤一郎と関西

1994年の旗揚げ公演以来、大阪の豊富な文化的コンテンツを発掘し、その魅力や価値を見直すことで、まちの賑わいづくりの一環として評価を受けている「なにわの語りべ公演」。その最新活動を通して、大阪のまちの魅力を再認識する。

「なにわの語りべ公演」での作品づくりから

## 関西での出会いと創作活動

文豪としての谷崎の名前はあまりに有名であるが、その人間像は意外と知られていない。関東出身であるのに、なぜ関西で文筆活動を続けたのか。独自の純文学を大成させた、その作風の源は何だったのか。

谷崎研究は以前から盛んで、複数の研究者によって成果が数多く発表されている。谷崎作品は、彼自身の過ごした土地とともに暮らした人と重ね合わせ

## 「なにわの語りべ公演」活動の展開

関西には豊饒な歴史や文化がある。まちの歩みや物語を発掘し、伝え、活用することで、住民の地域への愛着も高まり、来街者も増え、賑わいづくりや都市ブランドの構築、都市格の向上にもつながる。

そのためのひとつのプログラムとして、大阪を中心に「なにわの語りべ公演」活動を展開している。まちの歩み

やエピソードをわかりやすく親しみやすい物語として編集し、語りと映像、音楽効果も入れながら紹介している。もちろん、大阪以外の関西における題材もある。周辺の地域に活動を拡げてほしいという要望も増えてきた。そこで昨年度、谷崎潤一郎をテーマに選び、「谷崎潤一郎——愛と創作のジャンクション」と題した新作を上演した。本稿では、その制作プロセスのなかでの視点や、谷崎潤一郎（以下、谷崎）ならではの逸話を抜粋して綴ってみる。



↑自宅応接室での谷崎潤一郎



↑「谷崎潤一郎——愛と創作のジャンクション」なにわの語りべ公演風景

昭和24年撮影。前年には代表作のひとつ『細雪』が下巻まで刊行され、この年には文化勲章を受章している。

語りと映像、音楽、芝居も取り入れ、演出に工夫を重ねた。映像イラストは弓削ナオミの描きおろし。

2013年3月5日「平成」なにわの語りべ劇場2013 早春in プリーゼ（於、サンケイホール プリーゼ大ホール）より。

せてこそ、醍醐味がより楽しめる。資料や文献に導かれ、関西での足跡をざっと追ってみると、作品と実生活が表裏一体となり絡み合っている。が、小説とは異なる。その相関性こそが、数多くの谷崎研究者を生んでいる理由ではなからうか。関西の、よく知られているあのまちやこの場所に谷崎が住まい、有名作品の数々を生み出していたのだという事実、その経緯を詳しく知れば知るほど、感慨深いものがある。

## 生い立ちとデビュー

谷崎潤一郎は、明治19（1886）年、東京の下町、日本橋区蠣殻町、現在の人形町のあたりに生まれる。22歳で東京帝国大学文学部に入学、明治43（1910）年、24歳の時、『刺青』を発表。初期の谷崎は、耽美主義と呼ばれるほど、美と女性への偏愛、マゾヒズムといった捉え方をされている。大正12（1923）年、関東大震災にあった谷崎は、関西へ逃げ延びる。真冬の京都の底冷えに耐えられず、阪神間の芦屋あたりは気候が温暖であろうと引越したくだりでは、都会のほんぼん育ちで甘やかされてきたということが想像に難くない。

大正13（1924）年、『痴人の愛』が大阪朝日新聞に発表された。主人公のナオミは、妻・千代の妹、せい子<sup>せいこ</sup>をモデルにしており、実際も、谷崎は、日本人離れした容姿をもつこの少女にかなり入れ込んでいたという。千代を友人の詩人、佐藤春夫に譲ると約束し

大阪の出版社創元社刊。本文は変体がなによる。黒と赤2種の豪華な漆塗り装丁が大いに話題を呼んだという。

←「春琴抄」漆塗初版本

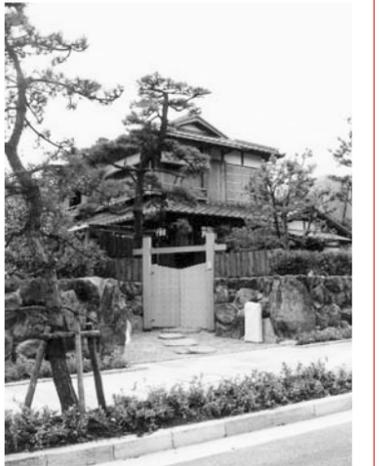




↑ 結婚式のあとで  
谷崎は昭和10年1月28日、『盲目物語』『春琴抄』などの登場人物モデルともいわれる松子と祝言をあげる。

↑ 結婚式のあとで

現在の倚松庵↓  
谷崎は昭和11年11月から18年11月までこの家に住んだ。自身も昭和7年ごろには、「松(松子)に倚(よ)る」との意からか、雅号として「倚松庵」を用いていたという。



写真所蔵・協力：芦屋市谷崎潤一郎記念館、神戸市

自分はせい子と結婚しようともくろんだが失敗。約束を撤回して、激怒した佐藤と絶交している。信じがたくも人間くさいドラマが作品の背景にある。歳月が事実をデフォルメしたとしても、そこに谷崎の創造力が加わって、後世に残る作品を生み出した、という構造が面白い。実生活での体験を作品に反映させるスタイルは以降も続くが、舞台として選ばれたのは、故郷の東京ではなく関西であった。

### 関西に対して 批判的であった谷崎

大正14(1925)年10月に『文藝春秋』に掲載された『阪神見聞録』で、谷崎は関西に対して批判めいたことを記している。見ず知らずの人に話しかけたり、電車で他人の新聞を借りて読む大阪人を捕らえて、ずうずうしく非常識な感じがすると。東京人から見た大阪人像は、昔も今もそう大きくは変わらないようだ。

そんな印象をがらりと変えてしまったもの、それは、大阪を代表する老舗の暖簾の中の世界、女性たちを中心とした上質な生活文化や日本の伝統美、そして大正から昭和にかけて花開いたモダニズムであった。特に谷崎が魅せられたのは、船場の本店のりよんさま(若奥様)である。根津松子(以下、松子)であった。

### 芸術的創作の 女神としての松子

谷崎の衝撃的ともいえる女性遍歴は、

女神が、芸術的な創作活動に不可欠なものであった。  
しかし松子とはいうと、『倚松庵の夢』と題した自らの手記の中で、ひとりの女として、普通の夫婦として睦みあえない寂しさや、念願の子どもを5カ月で中絶した無念さを後に告白している。松子が谷崎の理想の女性であり続ける使命は、ある意味残酷であり、そこに谷崎の強烈なサディズムが存在

していたと理解していいだろう。そんな生活のなかで、谷崎は、関西の風土、伝統文化などへの憧憬を深める。その情感が自身の繊細な美意識を磨き上げ、作品へ反映されている。そこには関西への賛美がある。また、戦争中に中断させられた『細雪』も、皇室のタブーだとほかしを強要された『源氏物語』(現代語訳)も、試練を乗り越えて完成させ、晩年は病と闘いな

作品の理解をより深めてくれる。千代と別れ、古川丁未子と2度目の結婚をした谷崎だが、その時発表した『盲目物語』には、根津夫人であった松子への憧れが滲み出ており、北野恒富に依頼した口絵も、当時の松子をモデルにしたことがわかつている。挙句、夫の浮気に悩む松子が谷崎に相談しているうちに、恋愛感情が生じたのか、東灘区の魚崎で隣あわせの家を借りて逢瀬を重ねる。新婚の丁未子にとっては悲劇である。雑誌記者の仕事をやめ、有名作家の妻になった喜びも東の間、打ち捨てられたのだ。谷崎はなぜ丁未子と結婚したのか、松子への思慕をより募らせるための手段としたのか、私たちの想像に委ねられるばかりである。  
生活でも松子の品格と威厳を第一とした。書生奉公のように下僕として松子に仕えることに喜びを感じるなど、マゾヒスティックな側面を多々感じさせる。谷崎にとって、普通の夫婦生活は不要で、常に仰ぎ見ることのできる

がらも、新たな作品を発表し続けるという、最期まで作家として貫き通した生き様は胸を打つ。

### 今に残る、 谷崎の足跡

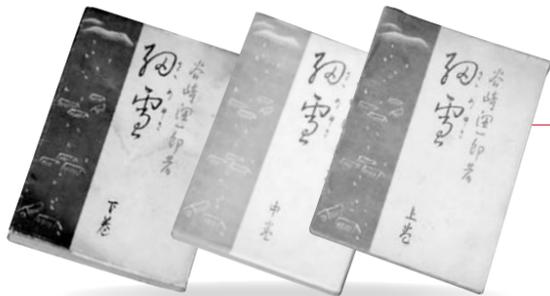
関西での谷崎の足跡については、たつみ都志氏の調査研究が詳しく、特に、真摯に空間をたどり現地取材してまとめた1冊『ここですやろ谷崎はん』(広論社)には、感動と感服の念を覚えた。このような手法で、地域とのつながりを具体的に追う研究は貴重である。



↑ 谷崎と松子、打出の家の庭で(昭和9年5月頃)

現在の兵庫県芦屋市宮川町に残る「打出」の家で、谷崎と松子は祝言をあげた。昭和9年から11年まで住んだという。

谷崎の世界は刺激的でかつ趣深い。そんな知的財産や遺産の存在意義を地域にもっと浸透させるべきである。関西人の誰もが誇りを感じるような、活用に向けた創意工夫が望まれる。



←『細雪』初版本

昭和18年、雑誌『中央公論』に一部発表されたが、奢侈(しゃし)な表現を理由に掲載を止められる。戦後、中央公論社から初版刊行。